

# 長野県革新懇ニュース

2024年4月号  
発行日4月10日  
会費 2,000円  
購読料 3,000円(送料込)  
振替 00510-3-15971

295

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会  
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕  
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内  
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 大村信夫さんインタビュー
- 2面 1面続き、「近現代信州の歴史回廊」関秀雄さん
- 3面 安茂里9条の会憲法学習会、高齢期運動連絡会講演学習会  
読者の声、漢字パズル、講演会と総会のお知らせ
- 4面 雨よ降れ「最後尾」を走る 窪島誠一郎さん  
写真で辿る信州と戦争 北原高子さん  
映画評論『52ヘルツのクジラたち』 内山到さん

長野県革新懇

検索



1950年東京都足立区生まれ。68年東京都入職、90年10月から都庁管理職。東京都保健福祉局参事などを経て、09年7月都庁退任。09年7月～11年3月社会福祉法人鶴風会総務部長

## 100回を迎える

# 手づくり『資本論』学習会

おむらのぶお 大村 信夫さん

(『資本論』学習会主催者)

### 『資本論』を読み 社会の仕組みを学ぶ

Q 『資本論』学習会の成り立ちについてお聞かせください。

私は10数年前に東京からこちらに移住してきました。当初は、さまざまな学習会や講演会に積極的に参加していましたが、そうしたところ、今日参加されている竹内恵美子さんなどから、労働者学習協議会的な勉強会をやりたいので協力してほしいというお話がありました。労働運動論のようなどきものを期待されていたのですが、ちよつと畑違いの思いがあったので、「科学的社会主義」がテーマでしたら、とお引き受けしました。2014年の5月に打ち合わせをし、9月から4人ほどで始めました。その後参加者が増えてきて2年経ちました。

そこで、「こんなに長く続けるなら『資本論』に挑戦したらどうだろう」という話をしたところ、やりましょうということになり、2016年の2月22日に第1回目を始めました。月1回のペースで、ほとんど休むことなく行なってきたので、今年の6月に100回を数えることになりました。

### 寸暇を惜しんで 社会科学理論を吸収

Q 社会科学理論や『資本論』をどのように学ばれたのですか？

私は都庁に入職し、若い頃は労働組合活動にも参加していましたが、その後管理職の道を選択して、石原慎太郎知事の頃には、いわゆる新自由主義にもとづく合理化、民営化路線を推進するポストに就いていました。前川喜平さんが「面従腹背」と言っていますが、当時はそんな心境でした。

しかし、そんな中でも社会科学の学習を通じて世の中の仕組みを学び、深めたいという思いは変わりませんでした。自宅でももとより通勤時や議会対応の待機時間などでも使って勉強を続けていました。その後、退職して社会福祉法人に勤め始める時、名古屋でヘーゲルの講読会があることを知り、お金がかかりましたが、定期的に名古屋に通って勉強しました。同好の士が集って侃々諤々議論をして、弁証法及び唯物論の認識を深める機会になりました。

### 国民が政治運動に 踏み出すことを指示

Q 『資本論』の学習会を続けてきて、その留意点及び「成果」をお聞かせください。

『資本論』は、一人で読み切るのが難しい著作です。この会は、その「読みきる」を目標にしています。全文にあたることによって、その経済理論だけでなく、マルクスの「社会変革」論全体を学習したいと思っています。そして、本文の読みを通して、マルクスの革命的な精神、「社会変革」論の科学性が、お互いに「実感」できれば、ということを考えています。

今の時代は、マルクスの時代から比べたら非常に分かりやすい時代だと言えます。テレビでも言っていますが、1年に数十億円という所得を得る人が生まれている一方で、年収200万円以下の収入しか得られない人が1千万人程度いるわけです。そこに資本主義の問題があると、多くの人が気づいています。気候危機の根源が資本主義だということも常識に近いでしょう。



学習会の様子

最後に、学習の「成果」ということで、日本経済を振り返ってみます。現在の日本の停滞、衰退というのは、自民党やいわゆる御用学者や評論家も認めざるを得ない状況です。経済成長がしない国になつていて、実質賃金の低下が続いている、異次元金融緩和の出口が見つかからないなど、深刻な状態です。カジノ産業の誘致、軍需産業の育成という施策はあっても、まともな経済危機打開策が出てこないわけです。

『資本論』では、機械制大工業の発展が「工場法」(標準労働日の制定)を生み出すことと同時に、逆に、社会に対する「標準労働日」の強制(政治)が資本主義生産を進展させることについても説明しています。「経済的社会構成体」としての資本主義社会は、政治と経済との、上部構造と土台との「作用・反作用」によって発展していく、と読めます。ご存知のように、日本の支配者は、多国籍企業の経営者や金融的な利益を得る富裕層に固まっています。経済を進展させるといふ発想が生まれてこないという状態ではないか。政治の停滞が経

【2面に続く】